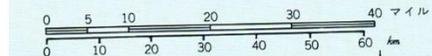


主イエスが「わたしは世の光」と言われた点の関連で学びます。

# キリスト時代のパレスチナ

Copyright by C. S. HAMMOND & CO., N. Y.



年中流れる川 ..... 首都 .....  
節によって流れる川 ..... 道路、通商路 .....

- ルサニヤの四分領
- サロメに与えられた領地
- ビリボの四分領
- デカポリス\*
- ヘロデ・アンティパスの四分領
- 独立領域\*
- ローマ行政長官の支配領
- ローマのシヤ州(アコ)
- デカポリスの町

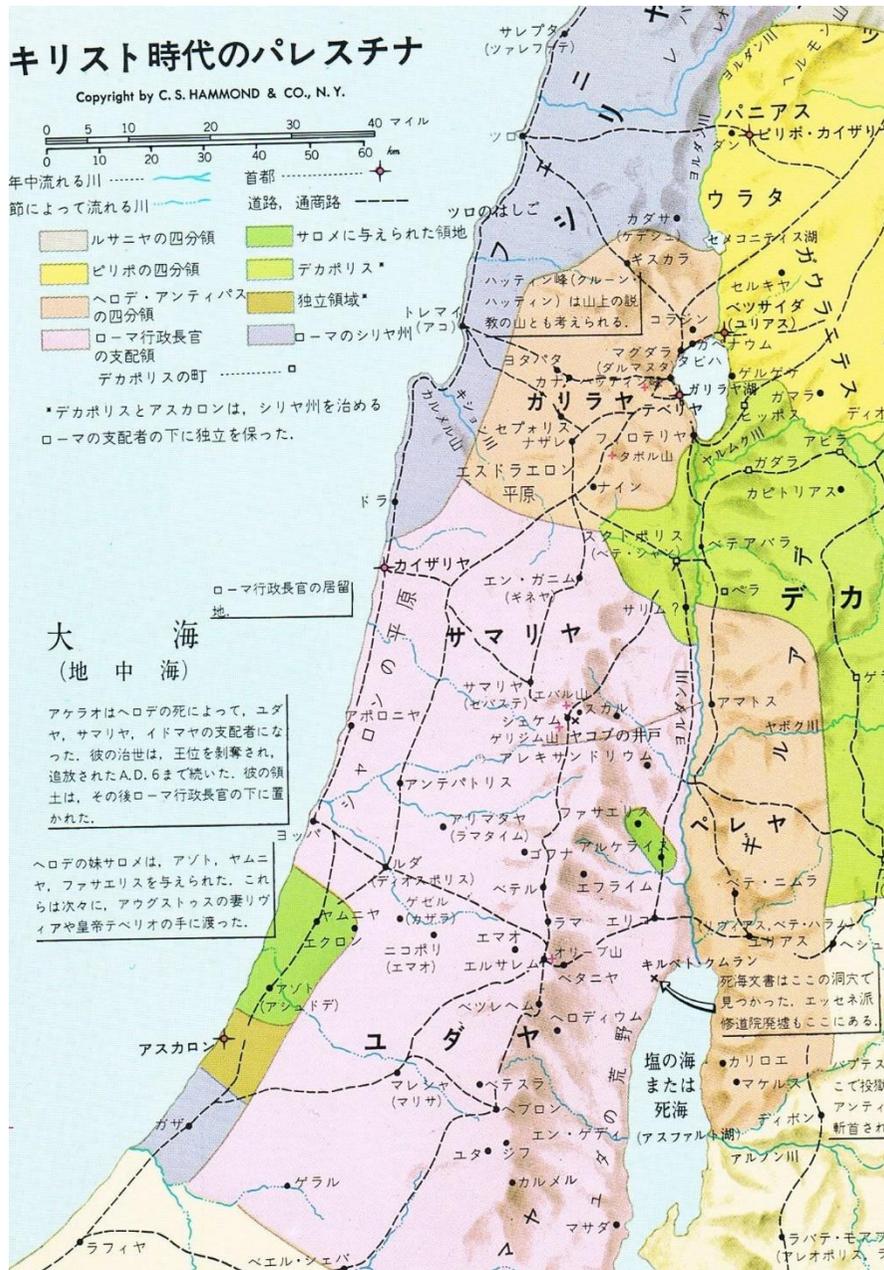
\*デカポリスとアスカロンは、シヤ州を治めるローマの支配者の下に独立を保った。

ローマ行政長官の居留地

## 大海 (地中海)

アケラオはヘロデの死によって、ユダヤ、サマリヤ、イドマヤの支配者になった。彼の治世は、王位を剽奪され、追放されたA.D.6まで続いた。彼の領土は、その後ローマ行政長官の下に置かれた。

ヘロデの妹サロメは、アソト、ヤムニヤ、ファサエリスを手に入れた。これらは次々に、アウグストゥスの妻リヴィアや皇帝テベリオスの手に渡った。



## 1. 闇を照らす光 (1～5節)

- ①ことばは神であった (1-2) 「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。」でここでの「ことば」は「言葉」ではありません。ギリシャ語ではロゴスで、新共同訳は「言」(ことば)と訳しています。ロゴスは超越して絶対なる存在を表します。そのロゴスである方は初めからあったのです。神とともにあったのです。つまりロゴスは神その方でした。そして、このロゴスなる方は初めから神とともにおられたと伝えられるのです。このロゴスなる方とは、イエス・キリストのことです。90歳の老ヨハネは、このようにしてイエス・キリストを伝えるために、一つ一つの言葉をかみしめるようにして、この福音書を記し始めているのです。
- ②この方によって (3) 「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。」ロゴスについて、この方とありますが、その方は創造主ご自身です。天地万物をお造りくださった方で、「この方によらずにできたものはない」とあるように、広い宇宙に広がる星々、地にある山、海、川、樹木、花々。空を飛ぶ鳥も、陸地をかける動物たちや、微生物もこの方が造られたのです。そして、何といたっても人間もこの方によって造られたのです。
- ③人の光 (4-5) 「この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」そして、この方はいのちの源でした。さらに、このいのちなる方は、人にとっての光であったのです。先週に学んだように、その光とは罪が支配する闇の世を照らし出す、聖なる光なる方です。罪を明らかにし、その罪を赦すことができる聖なる方なのです。だからこそ、闇がいかに深かったとしても、光なる方はその闇の世にあって救いを与えることができるのです。

## 2. パプテスマのヨハネ (6～8節)

- ①ヨハネという人 (6) 「神から遣わされたヨハネという人が現れた。」さて、ここに神から遣わされた人が現れました。ヨハネです。この人はパプテスマのヨハネと呼ばれる人で、キリストの弟子のヨハネとは別人です。彼は罪の赦しのために、悔い改めのパプテスマを宣べ伝え、ヨルダン川で人々にパプテスマを授けていました。らくだの毛で織った物をして、腰には皮の帯をしめ、いなごと野蜜を食べていました(マルコ1:4-6)。
- ②光の証人 (7) 「この人はあかしのために来た。光についてあかしする

ためであり、すべての人が彼によって信じるためである。」ヨハネは最後の預言者と言われ、その人格は高潔で人々から、この人こそが旧約聖書で預言されているメシヤではないかと評判になっていました。4,5節のいい方なら、この人こそ「光」ではないかと思われるほどだったのです。しかし、今ここには、ヨハネはあかしのために来たとあります。つまり、彼自身は光についてあかしするために来た人であると言うのです。つまり、彼の働きを通して、光である方を信じるように伝える人であるというのです。

③光ではない (1)「彼は光ではなかった。ただ、光についてあかしするために来たのである。」バプテスマのヨハネは光ではなかったと明瞭に語られます。7節にもあるように、彼は光について証する人なのです。ヨハネ自身が、ユダヤ人の質問に対して、「私はキリストではありません。」と答え、「それではいったい何ですか？ エリヤですか・・・という問いに対してこのように答えます。「『私は主の道をまっすぐにせよ』と荒野で叫んでいる者の声です。」と。そして、キリストについては、「私はその方のくつのひもを解く値打ちもありません。」と述べました(ヨハネ1:19-27)。ヨハネはどんなに称賛されても、自分は光である方の証人であると自覚していました。

### 3. この方を受け入れた人々には (9~13 節)

①まことの光 (9-10)「すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。」ヨハネの福音書には、イエス・キリストの誕生の次第は詳しく記されていませんが、ここに光である方すなわち、キリストが世に来ようとしていたとあります。「この方がもともと世におられ、世はこの方によってつくられたのに」というのは、そもそもこの方は人間を造ってくださった方であり、創造の出来事からずっと、この世に関わっておられたということです。が、世の人々はこの方のことを気づかずにいたのです。もっと強くいえば、認めようとしなかったということになります。

②特権 (11-12)「この方はご自分のくんに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」この方は、ご自分のくに(領土、被造物の世界)に来てくださったにもかかわらず、その民は受け入れなかったのです。つまり、ことば(ロゴス)なるかた、いのちであるかた、光である方を彼らは認めなかったのです。しかし、そのような中でも、この方を受け入れた人、つまりイエス・キリストに信頼して歩んだ人々には、神の子どもとなる特権(資格、権利)を与えられたのです。つまり、キリストによって救われると言っているのです。

③神によって (13)「この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の

意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」信じて救われた人々の霊的な誕生は、血統によるのではなく、生まれながらの人間の欲望や人の意欲によってでもなく、ただ神によるのだという、神の恵みが強調されるのです。

《結論》 イエス・キリストが「わたしは〜である」(エゴ・エイミ)と言われた箇所を、ヨハネの福音書から学んでいます。最初は、「わたしはいのちのパンです。」と言われたところから2回。前回は「わたし世の光です」とい

うイエス・キリストの言葉から学びました。今朝は「世の光です」と言われたこ

とに関連して、ヨハネの福音書の冒頭から学んでいます。

ここには、ことば(ロゴス)、いのち、光である方について記されています。その

方はイエス・キリストであるということを確認しました。ヨハネの福音書の冒頭

の記事は他の福音書と比べると、とても変わっています。何かとても哲学的な

感じでもあります。しかし、この福音書全部が哲学的なわけではなく、キリスト

と人々との出会いの出来事が次々に出てきます。たとえば、ニコデモ、サマリヤ

の女、38年も病気にかかっていた人などとキリストとの出会いが出てきます。

そして、そうした出会いや出来事やイエス・キリストの説教などを縦糸のように

して、結びつけているのが「ことば」、「いのち」、「光」でもあります。

そんなわけ

で、今朝は最初に一つのお勧めをします。冒頭のこの箇所を意識しつつ、ヨハ

ネの福音書を通読してみたいかがでしょうか。

その上で、今朝の聖書箇所から「光である方」について教えられていきまし

よう。光である方、イエス・キリストは創造主であり、神ご自身であることがはっ

きりと伝えられました。そして、光である方は闇に輝いている方である(5節)と

も語られました。そして、バプテスマのヨハネのことが記され、彼は光である方

の証人であること述べられます。どの福音書にもバプテスマのヨハネに

ついて  
の記事がありますが、彼は高邁な精神と高潔な人格をもち、清貧な生活をおくる宗教者、預言者でありました。多くの人が、彼こそはメシヤ（救い主）ではないか」と思うほどでありました。実際のところ、彼のところには多くの人々がやって来て悔い改めて、バプテスマを受けたのです。ヨハネが人間的な野心のある人であるならば、すぐに新興宗教が立ちあがるほどの人気でした。しかし、彼の麗しいところ、尊敬すべきところは、決して自分を立てることなく、身の程をしっかりとわきまえていたところでした。本当の意味で謙遜な人だったのです。ヨハネは、キリスト（救い主）が来られるための、道備えの役割を果たす者であるという自覚と使命感がありました。ある面ではそれを貫いた、人間としてまことに尊敬すべき人でした。

ヨハネは1:27でキリストについて、「私はその方のくつのひもを解く値打ちもありません。」と告白しています。ヨハネがいかに人間として優れていたとしても、どこまでも預言者としての役割を果たした人間でありました。歴史上に多くの教祖や宗教家、求道者がいました。尊敬すべき方々もたくさんいます。しかし、バプテスマのヨハネについて福音書の記者が「彼は光ではなかった。ただ光についてあかしするために来たのである」（8節）とあるように、決して光ではありませんでした。アブラハムもモーセも、ダビデも、尊敬すべき信仰者でしたが、弱く、間違いを犯しやすい人間でした。イザヤ、エレミヤといった預言者たちも、悩みを抱えながら歩む求道者でした。

キリストは「わたしは世の光です」と何の躊躇もなく言明されています。この方については尊敬するというよりも、信ずるのです。この方には、寄り

頼むことがふさわしいのです。この方にお任せして歩むのです。イエスが「光」であることを心から受け入れ、光である方と共に歩いていきましょう。